

筆者の段落意識の方向をこのようにとらえる時、「人間そのものの偉さ」とは「人間以外のもの」の持たぬ「心」をさすと読みとれるにちがいない。さらに、この

ことから、「ほうぼうにある」とは「人間の心を育てる場面はいたるところにある。」という意味であることが明らかになってくる。それが、次の段落の「毎日の……巡り合う。」でもあり、(4)の筆者の生活態度でその具体的なうらづけをしていることが、順次読みとれるであろう。

こうして(2)を Bridge-paragraph として、その改行の意識を追求することで、「筆者の段落」を読むことができるのである。

(2)を含めて、(1)、(2)、(3)、(4)をひとまとめにすることもなければ、(1)、(2)、(3)と(4)というようにまとめることもないのである。自然のまま(2)は、Bridge-paragraph として独立させておけばよい。そうすることによって、筆者の考えにせまることが楽にできるからである。

もう一つ例をあげる。(紙面の都合上、実線と点線で囲んだ部分を行変しているが実際に行変されていない。実際の文章の段落は()の番号による。)

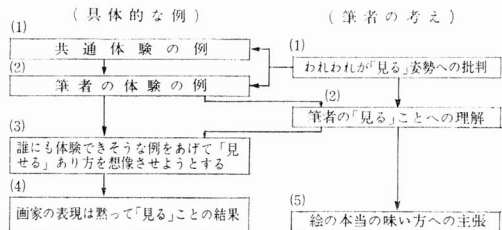
(1)の①、②、③と(2)の④の例は実用の目的に目がいて本質を見ないということで結びついている。(3)冒頭の「たとえば」が(2)末尾の囲みの部分を受けている。こうして、(2)は(1)と(3)に同等に結びついている。

そこで、(2)は点線の囲みの部分「つまらぬ話をするなどと……驚くでしょう……。」を柔軟な展開点とした Bridge-paragraph であると考え、「筆者の段落」を読んでみよう。

「絵はわかろうとするのでなく黙って見ればいい。」という具体的行為としてとらえにくい筆者の主張を、どんな例と順序でのべるかというところに筆者の段落意識が働いていることがわかる。

Bridge-paragraph を中心に下図のように「筆者の段落」を読むことができる。図の「筆者の考え」は「読者の段落」といえるだろう。それは骨でそれだけでは筆者の主張を理解したとはいえない。「見る」ことの意味は、時計、りんご、いす、ライター、すみれの例の中にある。とくにライターの例は、他の例と筆者の見解を結ぶものとして大切にすべきであり、それがスプーをスプーとして味わうことであろう。

図 9



5. おわりに

論説・評論といえども人間が書く以上情感の論理もあはずである。そこを読むために、Bridge-paragraph という文章の自然の流れにしたがった考え方をもう少ししとり入れることが必要のように思うがどうか。

(1)わたしが、普通、わたしたちの生活の中で、どんなぐあいに目を働かせているかを考えてみるとよい。特になんの目的もなく物の形だとか色合いだとか、その調和の美しさだとかを見ることが、いわば、ただ物を見るために物を見る、そういうふうには目を働かすということが、どんなに少ないかにすぐ気がつくでしょう。たとえば、時計を見るのは時間を知るためです。だから、①時計を見て針だけしか見ない。りんごは食べるもので、いすは腰かけるものだ。だから、②りんごが、どんなに美しい色合いをしているか、つくづくながめたことのある人は少ない。③毎日すわっているいすが、どんな形をしているか、はっきりと見定めている人などほとんどいないでしょう。

(2)話は私ごとになるが、わたしは、ロンドンのダンヒルの店で、なんの特徴もないが、古風な、いかにも美しい形をしたライターを見つけて買って来た。書斎の机の上に置いてあるから、今までにたくさんの来客が、それでたとえばこの火をつけたわけだが、火をつけるついでに、よく見て、④これは美しいライターだと言ってくれた人はひとりもない。なるほど、見る人はあるが、ちょっと見たかと思うとすぐ口をきく。これはどこのライターだ、ダンヒルか、いくらだ、それでおしまいです④黙って1分間もながめた人はいない。つまらぬ話をするなどと言わないでください。諸君は試みに、黙ってライターの形を1分間ながめてみるといい。1分間にどれほどたくさんなものが目にえてくるかに驚くでしょう。そして、ライターの形だけを黙ってながめる1分間がどれほど長いものかに驚くでしょう。「見ることはしゃべることではない。ことばは目のじゃまになるものです。」

(3)たとえば、諸君が野原を歩いていて一輪の美しい花の咲いているのを見たとする。見ると、それはすみれの花だとわかる。なんだ、すみれの花か、と思った瞬間に、⑤諸君はもう花の形も色も見るとをやめるでしょう。諸君は心の中でおしゃべりをしたのです。すみれの花ということばが、諸君の心のうちにはいってくれば⑤諸君はもう目を閉じるのです。それほど、黙って物を見るということはむずかしいことです。すみれの花だとわかるということは、花の姿や色の美しい感じをことばで置き換えてしまうことです。「ことばのじゃまのはいらぬ花の美しい感じをそのまま持ち続け、花を黙って見続けていれば、花は諸君に、かつて見たこともなかったような美しさを、それこそ限りなく明かすでしょう。

(4)画家は、皆そういうふうには花を見ているのです。何年も何年も花を見て描いているのです。そうしてできあがった花の絵は、やはり画家が花を見たもう一方で見なければなんにもならない。絵は、画家が黙って見た美しい花の感じを表わしているのです。花の名まえなどを表わしているわけではありません。何か妙なものは、なんだろうと思って、諸君は注意して見ます。その妙なものの名まえが知りたくて見るのです。好奇心から、すみれの花だったのかとわかれば、もう見ません。これは好奇心であって、画家が見るといって見ることではありません。画家が花を見るのは好奇心からではない。花への愛情です。愛情ですから、平凡なすみれの花だとわかりきっている花を見て、見飽きないのです。好奇心から、ピカソの展覧会などへ出かけていってもなんにもなりません。

「美を求める心」小林秀雄：中等新国語2年—光村図書 現代国語—教育図書研究会 高等学校現代国語—角川書店